
アデラード

市川イチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アデライド

【Nコード】

N9232Z

【作者名】

市川イチ

【あらすじ】

聖エルンスト高等学校の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離れた。短い旅の終点がきたのだった。離れてしまった手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪って、この親子の上に落ちかかってくるようだった。

（本文より）

序章

【0】

聖エルンスト高等学校の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離した。

短い旅の終点がきたのだった。離れてしまった手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪って、この親子の上に落ちかかってくるようだった。

このとき、その一瞬の冷たさが彼にちよつとした悲しみや切なさをもたらししたが、それでも彼はかたくなに唇を引き結んでいた。何か言うことはしなかった。心にはとうにあきらめと絶望とが渦巻いていて、真冬の木枯らしのように吹き荒れていた。

いまや何を願ってもどうにもならないのだということを少年は知っていたし、断頭台のうえに引き立てられた囚人が、もはや泣こうがわめこうが首を切り離される運命にあるのだということに疑いがないように、自分の運命がこの白亜の正門のまえに投げ出されていることをも知っていた。それは、今たしかに目に見ることができた。取りだされたばかりのいけにえの心臓のように赤く、ほふられた子羊のようにぐったりとした、ちっぽけで、それでもある種のとうとさを持った、自分の運命というやつ姿だった。

「ここなの」

「そうだ」「低い声が答えた。「ここがそうだ」

父はずつとうわのそらで、うちを出てから一度もエンゲルの顔を見ようとはしなかった。今もそうだった。父の声はよそよしく、ぎこちなかった。そむけたままの横顔にはびこっている無精ひげと、

耳の後ろにある二つのほくろが、いま、エンゲルに見える父の姿だった。

「中に入ったら、校長先生の部屋に行つて、その……話をするんだ。これからのことや、説明なんかを。わかるな？」

エンゲルは小さな声で「うん」と答えた。

本当はよく分からなかった。なにもわからなかった。それでも分からなければならないということ、あるいは分かったふりをしなければならぬということをつかっていたので、彼はそうしたのだ。運命の無慈悲な手に襟首をつかまれた者は、ただうなだれておとなしく言うことをきくほかに、できることなど何もない。まっとうな人間に与えられうるすべての幸福な未来から自分たちは切り離されて、それだから今、ここにいるのだ。少年はそのことだけを知っていた。

父はそれから、重たくて擦り切れたコートのポケットをごそごとさぐり、何かをとりだして、エンゲルの手に握らせた。それはいくらかの小銭だった。父は穴のあいた手袋をしていた。

エンゲルが手の中のじゃらじゃらを見つめていると、父の手がのびてきて、かれのぼんやりした指を無理やり閉じさせた。そしてエンゲルの着ている新しい制服のポケットに突っ込んだ。エンゲルはずっと何も言わなかった。

父は溜息をついた。そしてエンゲルの正面にまわり、息子の両肩に手をのせた。こうして向き合うつと、かれはとても久しぶりに父の顔を見た気がした。ぼさぼさで、無精ひげだらけで、疲れ切つていて、まるでうすぎたない浮浪者みたいだ。この人は、いつからこんなふうになつちまったんだろうか。思い出せない。でも、こんなにくだびれて、よごれきつて、ちっぽけだ。顔立ちは似ているはずだが、もうよくわからない。ただ深緑の目の色ばかりが自分と同じだ。

父はゆっくり、しわがれた声で吐き出すように言った。「お前は最初、おれの希望だった」

エンゲルは、じつと聞いていた。

「十四年前だな、そうだな？ あのとくでもない女が逃げた。置き土産を残してな。おれは怒ったが、同時におれは考えたんだ、赤ん坊のお前を前にして、ひよっとしてお前の面倒を見ることで、真人間になれるかもしれないと思った。少しぐらいはやり直せるかもしれないと思ったんだ。だが駄目だった。どうだ、おれは何一つ変わらんな。お前はおれをまっとうな人間にしてはくれなかった。だがおれはお前を責めたりしない。だってお前は悪くないからな。だからお別れするだけだ。さようなら、おれのエンゲル。おれがお前をそんなふうに呼ぶのはこれが最後だ、いいな？」

「はい、お父さん」

エンゲルの返事をききとどけて、父は両手を離した。肩はふっと軽くなり、同時に、少年はなにかとても大切なものが失われたことを知った。

「お前がおれをそう呼ぶのも、最後だ」

父はもう振り返らなかった。擦り切れたコートの裾を揺らして、木枯らしの中を、うつむき加減に去っていった。うちへ帰って行っただではなく、あの人はもう自分の知らないどこかへ去っていくのだということ、エンゲルは知っていた。あの人は去るのだ。だからもうどこへ行っても会えることはないのだし、あとはお互い、べつべつなものを食べ、べつべつなものを見ながら、最後の日まで、べつべつの生き方をするだけなのだ。これは永遠のお別れにちがいない。父の背中を、踊る枯葉が何枚も追いかけていった。

こげ茶色のうしろ姿が見えなくなったところ、門が開く音がした。エンゲルが振り向くと、森にかこまれた古城のような聖エルンストのポーチの奥から、上品なスーツ姿の紳士が歩いてくるところだった。ああ、この人がそうなのだ、とエンゲルはおもった。父に棄てられたかわいそうな僕をひきとつてくださる慈悲深い校長先生とやらが、この人なのだ。

彼はエンゲルを見るや、鷹揚に両手を広げて歓迎の意を表した。

「エンゲル・ミユラー？」と尋ねる声は、その姿とおなじように上品で、とてもあたたかく、柔らかだった。

「一人かね？」

彼は少し不思議そうに、エンゲルを見た。

「はい」

エンゲルは、ただ一言、そう返事をした。

第一話

【1】

新緑に木漏れ陽が散っていた。さながら白亜の古城のような聖エルンストの外壁に、それは美しく降りそそいだ。

エンゲルが何気なく「まるで光のシャワーだ」というと、「もう五月だもの」と、隣を歩いているオリバー・デーニッツが気さくな様子でほえんだ。それから肩をすくめて、こう付け足した。

「素晴らしいね。君が言うと、なんでも詩的に聞こえちゃうんだな」
「よしてくれよ」

「どうしてかね。僕が同じこと言っただって、君のようにはないだろうな。やっぱり見てくれというものはその人の評価に大きく影響するもんだと思うかい、エンゲル？」

「僕をからかってるなら、きかないぞ」

僕はこれでも女みたいな顔だつてことを気にしてるんだぜ、とエンゲルが片方の眉を上げてみせると、オリバーは面白がるように、へえと目を丸くした。愛嬌のある顔がことさらひょうきんになった。「それじゃ僕と取り替えようぜ、その顔さ！ そしたら毎週外出許可をもらってさ、街でガール・ハントとしゃれ込むんだ。きつとなびかない子はいないぜ、よっぽど好みが偏つてなけりゃね」

エンゲルはあきれ声を出した。「僕の顔がなんだつて？」

「そりゃあ、きみは滅多に外出しないものな。いいかいエンゲル、世間つてのはこの監獄みたいな聖エルンストを出たところにあるんだぜ。世の中には女の子つてものがいてさ、君みたいな顔をした奴のことがたいてい好きで、そのうえ何から何まで不思議だらけの生き物なんだ。まるで砂糖菓子そっくりさ。うっかり食べ過ぎると虫歯にかかっちゃうところまでね。でもたまらなくいいもんだよ。知

っている？」

「興味ないね」

オリバーは頭をかかえておおげさに叫んだ。「神よ！」

「きみってやつは、辞書で引いたみたいな優等生なんだからな。いったい何が楽しくて、この二度とない青春を生きてるんだ？」

そう言いながらオリバーの白い手が後ろからのびてきて、エンゲルの首にまきついた。彼はこの年頃の少年の多くがそうであるように、親密な相手にはすぐ手をのばして触れたがるたちだった。自分と同じように骨っぽいからだをした同級生が触れてくるくすぐったさに、エンゲルは笑って身をよじった。「離せよ、ばか！」

「みんな君のこと噂してるんだぜ、東館の堅物ってね。ここに来てもう半年にもなるのに、罰則のひとつもくらったことがないなんて奇跡だよ」

「学校つてのは自律の精神を教えてくれる場所だと思っただけだね。そうじゃない、先月は二度も罰則をくらって、今週末の外出許可が取り消しになったオリバー・デーニッツ？」

エンゲルがやり返した。オリバーはとたんに顔をひきつらせて、のどがつつかえたような声を出した。「ひどいや」

「どうだか」

「僕を憐れんでくれよ、エンゲル！ だからきみにこうして 僕らの頼れる舎監生であるエンゲル・ミューラーに、真正面からお願いしてるってわけじゃないか。君ときたら、ワイロのひとつも受け取ってくれやしないんだから」

オリバーが手を緩める。その隙に、エンゲルは体を反転して自由になる。

ちょうど向き合うかたちになって、乱れた髪と首元のタイを直しながら、彼はわざと首をかしげて、何のことかわからないというふりをした。オリバーは雨の日に棄てられた仔犬だつてもうちよつとましな目をするだろうというほど情けない顔をして、ばつ悪そうに手を後ろにやってもごもごと口元を迷わせた。「きみの言うことな

ら、先生も無視しやしないだろ」

「さてね」

エンゲルはあくまでもそらつとぼける。オリバーはたまらずに泣きついてきた。

「頼むよエンゲル、先生にかけあってくれ！ 今週末はどうしても約束があるんだ、ベルタって可愛い子でさ、うまくいきそうなんだ。この僕が！」

「珍しく？」

エンゲルは皮肉のつもりで口にしたのだが、オリバーは大いになぜいた。

「そうさ、彼女、僕に好意を持ってるんだ。こんな奇跡、二度はないって断言できるね。今週末に会えるかどうか勝負なんだよ」

「愛には障害も必要だってね。クラウディオ・デユフナーが言ってたよ」

ひょうきんな顔を忙しく回転させて、オリバーは悲鳴じみた声をあげた。

「あんな嘘つき野郎と僕をいっしょにするのか？ あいつはもてるから、言い寄ってくる女の子をかわすためにそんなこ言つのさ。僕は違うよ、だって」

しばらく熱弁につきあってやった後、聖エルンスト高等中学始まって以来の優等生は、この悪友のためについに折れた。「考えとく」それを聞くやオリバーは、文字通りとび上がって喜んだ。頼んでもいないのに、エンゲルの手から教科書一式と筆記用具をひたつて走り出し、「恩に着る！」と叫んだ。「これは僕に持たせてくれ！ ほかに重たいものはないか？ 今日は天気がいよいよだけど暑いなんてことは？ その上着はどうするの？」

彼は、エンゲル・ミュラーから「考えとく」の一言を引き出すことに成功したときは、ほとんどの場合においてよい結果がもたらされることを知っているのだった。何かにつけこの調子だから、彼はどこに行ってお調子者と呼ばれる。だが、その言葉には一片の親し

みと愛情とがある。彼を心から嫌いになれるものは、この広い校舎のなかにはいないにちがひなかった。いつだって彼のほがらかさと魅力的なブラウンの目は、そのとき相対する誰かの心の中に、いとも簡単に入り込むことができた。彼が口にするちよつとした冗談は、それを聞いた誰もかれもの眉をほんのちよつぴりだけ下げるのに役立った。そんなデーニッツの憎めないところを、結局のところエンゲルもまた嫌いになれず、それだからこうして隣り合つて歩くことがしばしばあるというわけだった。彼らはよい友人どうしだった。

それでもエンゲルは念を押した。飛び跳ねながら前を行くオリバーの背中に向かって、

「僕は考えとくつて言ったんだぜ。よく考えた結果、やっぱりこんなやり方は君のためにならないと思つて、先生に別のお願ひをすることもあるかもね」

「エンゲル、そんな！」

オリバーがひっくりかえつたような声をあげて立ち止まった。振り返つた顔が真っ青だ。

二人でしばし顔を見合わせ、やがて少年たちは、どちらからともなく笑いあつた。

*

オリバーを先に戻らせてしまうと、エンゲルはひとり中央棟にいた。そいだ。この半年の間にすっかり慣れ親しんだ聖エルンストのなかには、もう目をつぶつても目的の場所にたどり着くことができた。廊下のじゅうたんの踏み心地、壁のてざわり、手すりの磨き込まれた艶までが、いまや彼のものだった。

途中、幾人もの生徒とすれ違つたが、みなエンゲルに親愛のこもつた挨拶を投げてきた。「やあ、ミユラー！」と気さくに呼びかけ

てくる者もあれば、意味深な眼を投げてくる者もいた。このあいだノートを貸してやった上級生は、「先日は助かったよ、今度お礼をさせてくれ!」といって肩をたたいてきた。彼は落ち着いた笑顔をうかべて、ひとりひとりに手をあげて応じた。そうすることが重要だった。そうして、悠々と廊下を歩きつづけた。

やがて一つの扉の前で彼は立止った。まるでこの部屋の住人を象徴するような、りっぱな獅子のレリーフの扉を二度ノックすると、なかから「どなたかね」と低い声がした。「エンゲル・ミユラーです、ヘル・エドゥアルド」

「お入り」

エドゥアルド教師は立派な机で書き物をしていた。思えばいつもそうだった。この先生が、たとえばソファでくつろいでいたり、うたた寝をしたり、靴下を脱いで背伸びしたりしているところを、誰も見たことがない。タイをほんの少しゆるめたところすら、誰も見たことがない。

教師の机は窓を背にしているのでひどい逆光だったが、エンゲルはまぶしさを顔に出さなかった。静かにエンゲルが入室すると、彼は少し顔を上げ、厳格な灰色の目でエンゲルを真正面にとらえた。彼のこの目ににらまれて、震え上がらない生徒はいなかった。むしろ、ただひとり、エンゲル・ミユラーを除いては。

「何か用かね、エンゲル・ミユラー? 先日のレポートなら、いま採点をしているところだよ。返却はもうしばらく待ちたまえ」

エンゲルは扉を後ろ手に閉めて、肩をすくめた。

「そのことじゃないんです」

「まあ待ちたまえ。これを済ませてしまおうから」

エドゥアルド教師は入り口のちかくの、来客用のソファを目で指した。エンゲルは言われたとおりにした。それから、何気なく室内を見回した。天井には琥珀色のシャンデリアが吊り下がっている。本棚にはびっしりと蔵書がならんでいる。床のじゅうたんは少しくすんだブドウ色。とても品のいい色だと彼は思う。エドゥアルド教

師が向かっている机には、このあいだエンゲルが書いて提出したレポートが載っている。その隣には、白磁のカップがある。

「よければ、お茶をお淹れしましょうか。カップが空では？」

「できるかね？ これは」

「サモワールの使い方は知っています」

「ならお願いしよう」

エンゲルは立ち上がり、てきぱきと準備を始めた。サモワールに火を入れる。ひとそろいの道具を並べ、戸棚からジャムのびんを取り出し、スプーンの準備をする。しばらくすると部屋に紅茶の香りがただよいはじめた。すばらしい香りの茶葉だった。うんと高価にちがいない。こういったものに妥協をゆるさないのは、いかにもこの厳格な教師らしいとエンゲルは思った。ふと顔をあげると、エドワード教師はいつしか採点の手をとめて、じつとエンゲルの手元を見ていた。「どこで？」

「父が使っていました」

エンゲルは笑顔で返事をした。「僕の父は、若いころにたくさん旅をしたので、いろいろな国のお茶の作法を知っています。これは一年ほどロシアにいたときに習ったのだと言っていました。ジャムやハチミツを好きなだけ食べてもいいんだって……ときどき子供みたいなことを言っんです」

「いい手順だ。お父さんに習ったのかね」

「はい」

「続けたまえ」

エンゲルは手元の作業にもどった。

香りののぼるカップを盆にのせてそばに行くと、エドワード教師は「ありがとう」と言って受け取った。「ジャムはどうなさいます？」

エドワード教師はジャムを所望した。エンゲルは多くも少なくもなく、ちょうどいいひとさじ分を掬って差し出した。教師はついに、「それで、今日は何の用かね」と口にした。「個人的な用件か

ね？」

「お話をさせていただきたくて」

と、エンゲルははにかんだような笑顔を作って切り出した。

「その……先生は、若い男女の　とりわけ僕らのような年齢の子供たちの異性交遊について、どう思われますか？」

エドワード教師はめずらしく、片眉を上げた。少しばかり怪訝な顔をしたように見えたが、すぐにいつもの厳格な表情にもどり、よどみなく答えた。「健全な男女の交流が、必ずしも青少年に悪影響があるものとは思わんよ。もっとも、われわれの時代にはそう考えられているようなふしもあったがね。だが五十年前の考え方が今の世に通用するとは思わん。大いにやりたまえ」

エンゲルは胸に手をあてて、いくらかおおげさな様子で「よかった！」といった。

「問題は、恋の魔力が強すぎるってことなんです」

「というと？」

「僕らのような未熟な青少年には、とても抗えるようなもんじゃない。女の子のほほえみや、白い手や、髪の毛の香りは、たちまち僕らを虜にしてしまうんですもの。頭の中は彼女のことでいっぱい、もし振られたらどうしよう？　勉強に身が入らないなんてことに、覚えは？」

「誰の話をしているのかね。どうも君ではなさそうだが、エンゲル・ミユラー」

「いま、まさに花をつけようとしている恋の若芽があるとして」

「まわりくどい表現はよしたまえ。誰のことだね」

「オリバー・デーニッツです」

エドワード教師は嘆息した。「そういったことにばかりずいぶん勉強熱心なようだね、彼は」

「まさに花をつけるか枯れてしまうかの瀬戸際に置かれた哀れなすずらんです。もし今週の待ち合わせに行けなかったら、相手の子は二度とオリバーに会おうとは思わないでしょう。彼は告白をするチ

ヤンスさえ永遠に失ってしまうんです、先生！　もし　どうか、彼の外出取り消しを撤回してくださったら、レポート十枚でも彼はよろこんでやると思うんだけど、どう思われますか？」

「本気かね？」

「僕だつて友人の恋を实らせたいと思うことくらいはあります」エングルはほほえむ。「恋の誘惑を知る青少年のひとりとして」

しばらく経つて、教師は長いため息をついた。

「今回はこのお茶に免じよう」

「ありがとうございます、先生」

「ただしオリバー・デーニッツ、彼はいかん。未熟な青少年であることを理由にするには、いささか羽目はずしすぎるところがある。これは寮長である君も認めざるをえないと思うが、そうだな？」

エングルははいと言つてうなずいた。

「レポートの出来によつては、二度と私の慈悲を期待できないと思いたまえ。そう伝えなさい。さがつてよろしい」

エングルは折り目正しく一礼して、彼の前を辞した。

部屋を横切り、扉に手をかけたところで、後ろからエドゥアルド教師の声が追いかけてきた。「美味しいお茶をありがとうございます。お父さんは、よほどきちんとした教えを君に授けたのだな」

「ありがとうございます」

「家族を大切にしたまえ。お茶の習慣を愛するすべての人は、必ず深く理解しあえる」

「父も同じことを僕に言います。家族は僕の誇りです」

「下がつてよろしい」

もう一度振り向いて礼をしたとき、エドゥアルド教師はすでに手元のレポートに目を戻していた。エングルは邪魔にならないよう、そつと扉を閉めた。そうしてから、そのままの姿勢で動きをとめた。獅子のレリーフの、空洞の眼が彼を見ていた。

家族は僕の誇りです。

彼がそうしていたのは一瞬のことだった。

突き放すようにドアから手を離すと、きびすを返し、規則正しい足音とともに廊下を歩き出した。このときオリバーのことはもう忘れていた。エドワード教師に言ったことも、言われたことも半分以上はどうでもよかった。それに彼は恋の誘惑なんて知らなかった。西日の射す廊下を歩きながら、彼はじつと自分の手のひらを見つめた。

ロシア式紅茶など淹れたのは今日が初めてだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232z/>

アデラード

2011年12月28日22時53分発行